傳奇勃興以前の唐代小説における虚構について

――「淮南獵者」（『紀聞』）と「安南獵者」（『廣異記』）の比較分析を中心として――

溝部良恵

はじめに

唐代小説の研究は魯迅の『中國小説史略』（一九二三、二四年）により本格的な研究がはじまった。魯迅は唐代小説の代表である傳奇は、六朝志怪の後を繼ぎながら、作者が構成、描寫の面で工夫を加え、想像力を驅使し意識的に創作したものと考え、初唐の王度『古鏡記』、無名氏『補江總白猿傳』、盛唐・張鷟『遊仙窟』を經て、中唐初期に沈既濟『任氏傳』（建中二年・七八一）、白行簡『李娃傳』（貞元十一年・七九五）、元稹『鶯鶯傳』（貞元二〇年・八〇四）などの作品が突如集中して書かれたという唐代傳奇變遷のアウトラインを示した。[1]そして以後現在に至るまで唐代小説研究は、基本的に魯迅の説に沿って進められてきた。以後の研究に與えた影響という側面から考えると、魯迅の研究の特徴を三點にまとめることができる。第一點は「小説も詩のように、唐代に至り一變した（小説亦如詩，至唐代而一變）」という『中國小説史略』第八篇「唐代之傳奇文（上）」冒頭の短い一句に集約されているように、六朝志怪から唐代傳奇への變遷において、大きな質的變化があったことを明らかにしたことである。それは具體的には、六朝志怪が怪異や異聞を事實として記錄したものであるのに對し、唐代傳奇は作者が自覺的に作った虚構の物語であるという兩者の性質の違いを明らかにしたものであった。第二點目は、魯迅は唐代以前に志怪以外に小説的な文章があることを認めながらも、題材の面などで、あくまで傳奇の源流は志怪に求められることを指摘したことである。また第三點目には、魯迅が『中國小説史略』の中で取り上げたのは、中唐期に書かれた單行傳奇が中心で、その他多くの志怪的要素を殘す作品、小説集にはほとんど觸れていない點があげられる。

魯迅以後の研究では、前者二點に問題の焦點を据え、さらに魯迅が取り上げた作品を主な對象として讀みを深めながら、様々な角度から志怪から傳奇への變遷、飛躍の過程、原因を探る試みがなされてきた。しかし現在に至るまでこの問題は、十分に解明されているとはいえない。その原因の一つは、魯迅が指摘した第一點と第二點、つまり志怪と傳奇の間における飛躍と繼承という問題がその意味を吟味されないまま取り扱われることによって、問題の焦點自體が曖昧になってしまっていることにあるように思われる。

例えば志怪から傳奇への飛躍が强調される一方で「志怪小説を基調として、さらに表現の華やかさを加え、構想に豊かさを示したものが唐時代の小説であるということができよう。[2]」というようなあたかも

志怪（事實の記錄）という核のようなものを、展開を複雑にし、描寫を詳しくするなどして、デコレートすれば、簡單に傳奇（虛構の物語）ができあがるかのような言い方がよくみられる。あるいは「表現手法については、事實を記すことから、想像の言葉を記すように發展し、意識的に目的を持って、虛構が用いられるようになった」[3]といった言い方も多く唐代小說史の記述によく見られる。志怪と傳奇の繼承性が重要視されるあまり、志怪は傳奇の前段階のようなもので、技術的に未熟なものであるかのようにとらえられ、兩者の性質の差異が曖昧にされている。

しかし本來事實の記錄と虛構の物語は、全く異なる考え方と目的のもとに書かれたものであり、題材を繼承しながらも、なぜそのような異なる世界が生み出されたのか、そのことが問題とされてきたはずである。つまり肝心なのは志怪をもとにしながらも、どのようにそれらが全く異なる考え方のもとに配置され、虛構の物語ができあがっていったのかということに問題の焦點を据え、考えてみることなのではないだろうか。

このような視點からあらためて考えてみると、魯迅がほとんど言及することなく、そのため從來の唐代小說史研究でも、少數の先驅的な傳奇を除いては空白期とみなされてきた初唐から中唐初期には、一見志怪風の作品が多數書かれている。量的には傳奇的作品よりも壓倒的に多いにもかかわらず、それらはまとめて志怪の亞流、志怪から傳奇への過渡的作品といった言葉で論じられてきた。しかし實際にそれらを讀んでいくと、全ての話をそのように一言で切り捨ててもよいものかという疑問がわいてくる。なぜなら中には六朝志怪から一歩踏み出そうとする動きが感じられる話があり、さらにその中の幾つかの話には、作者が明らかに意識的に物語を作ろうとしている痕跡を認めることができると思えるからである。『李娃傳』や『鶯鶯傳』といった中唐の傳奇に比べれば、荒削りな部分も多くあるが、逆にそうした表現を追っていくことによって、この時期の書き手達が、一つの虛構の物語を作るということは、單に志怪の題材を寄せ集めるのではなく、全く異なる方法を要するものであることに氣づき、物語を作るためにいかに試行錯誤を重ねていたのかが、垣間見えてくるように思われる。

そこで本稿では、それぞれ盛唐期、中唐初期に成立し、ともに志怪から傳奇への過渡的作品と評價される小說集『紀聞』と『廣異記』から「淮南獵者」（『太平廣記』卷四四一）と「安南獵者」（『太平廣記』卷四四一）[4]という象の報恩譚としてあらすじをほぼ同じくする二話を中心に取り上げ、比較することで、中唐傳奇勃興以前の唐代小說においてどのように虛構の物語が作られていったのかを考えてみたい。

一　志怪　『異苑』卷三

「淮南獵者」と「安南獵者」のほかに類話としては、六朝劉宋・劉義敬『異苑』卷三に收められる話、唐・張鷟『朝野僉載』「華容莊象」、『廣異記』「閩州莫徭」、唐・裴鉶『傳奇』「蔣武」（『異苑』以外全て『太平廣記』卷四四一所收）があげられる。まず『異苑』卷三の話の分析を通して、事實の記錄としての志怪の描き方の特徵を確認してみたい。

『異苑』卷三[5]　始興郡陽山縣有人行田，忽遇一象。以鼻捲之，遙入深山。見一象脚巨刺，此人牽挽得出。病者卽起，相與躅陸，狀若歡喜。前象復載人就一汚濕地，以鼻堀出數條長牙，送還本處。彼境田稼常爲象所困，其象俗呼爲大客，因語云，我田稼在此，恒

爲大客犯，若念我者，勿復見侵。便見躑躅如有馴解。於是一家業田，絶無其患。

始興郡陽山縣（現廣東省＝括弧内筆者注。以下同）のある人が畑を歩いていると、突然一頭の象と出くわした。象は鼻でその人を巻き上げると、山の中奥深くへと入っていった。見れば一頭の象の脚に大きな棘が刺さっている。この人は棘を引っ張って抜いてやった。するとその象はすぐに起きあがり、脚を交互に踏みならし、喜んでいるかのようである。はじめの象は再びその人を背に乗せ、低濕地に至ると、鼻で數本の長い象牙を掘り出し、もとの場所に送り返した。そのあたり一帶は、いつも田畑が象に荒らされていて、人々はその象のことを大客と呼んでいた。そこでその人は「私の田畑はここにあって、いつも大客に荒らされております。もし私のことを思ってくれるのであれば、二度と荒らさないで下さい。」と言った。すると象は足踏みして、それはあたかもわかったと言っているように見えた。それ以來その家の田畑は、一度も象に荒らされることはなかった。

以上がこの話の全文である。この話はある人が實際に體驗した不思議な出來事として、人々の間で語り繼がれていた話を書きつけたものだろう。報恩譚の主な内容を記した前半は、出來事が時間を追って、過不足なく書かれており、よくまとまっている。しかし前半と後半のつながりには、必然性が感じられない。象がその人の前に現れる前から、田畑が荒らされているという事實があるのに、それが前半のエピソードに何の影響も與えておらず、二つのエピソードを互いに關連づけ、一つの物語を作ろうとする意志が感じられないのである。このため前半で手際よく描かれていた人間と象の交流や、報恩譚というこの話の肝心のおもしろさに焦點が絞りきれておらず、散漫な印象を與える。このような話を唐代に書かれた話と比べると、確かに六朝の志怪は傳奇の前段階で、志怪の文體や話の構成は技術的に未熟なものである、という見方をされるのも致し方ないように思えてくる。しかし注意しなければならないのは、上に指摘したような點を缺點とするのは、現代の我々の小説觀を基準にした見方であるということである。そもそも志怪とは書き手の側にとっては事實の記錄であり、讀者を樂しませたり、喜ばせたりすることを意圖して書かれたものではない。ところがこのことはしばしば忘れられ、題材が類似するために、六朝の志怪と唐代の小説の差異が曖昧にされてしまう。そこで以下の論考を進めていくにあたって、まず「六朝志怪とは何か」ということを確認しておくことが必要と思われる。

このことについては、すでに『聊齋志異―異を志す流れの中で―』をはじめとする戸倉英美氏の一連の論考の中で、明らかにされている。[8]戸倉氏の研究の特徴は六朝以來各時代における怪異の描き方を分析し、それぞれの描き方の違いを各時代の怪異觀の違いの表れとしてとらえていることにある。そのことによって戸倉氏は、一般に六朝志怪について言われる、傳聞をそのまま記錄しただけだから簡潔で、物語的なふくらみがない、といった特徴は、むしろ「事實と信じられていたからこそ、簡潔なのだ」ととらえなおすべきであると指摘する。

一方で戸倉氏は、志怪には簡潔な記述だけでなく、時折詳細な記述があることに注目している。例えば戸倉氏があげている例として、東晉・陶潛『搜神後記』巻七に收められる「會稽の盛逸がある朝起きて

みると、門外の柳の上に、赤い衣に冠をかぶった二尺あまりの男の人がいて、柳の木の葉の露をなめている。盛逸に氣がつくと驚き、たちまち姿を消してしまった」というあらすじをもつ話がある。原文にすれば五十文字あまりの短い話である。柳の葉を陋める人の姿は詳しく書かれながら、この人が何故盛逸の前に現れたのか、どんな意味があるのかといったことは全く書かれていない。戸倉氏の言葉を借りれば、讀者は「細部はありありと見えているのに、一切の解釋を拒否され、途方に暮れる」のである。六朝志怪の記錄者は、自分達の把握した事實のみを正確に記そうとする。事實はただ朝早く柳の木の上に赤い衣を着た人がいたことであり、現れた目的、意味といったことは、記錄者達にとっては知るすべのない、解釋する必要のないことである。[7]また逆に知り得た事實であればそれがどんなに奇妙なものであっても、取捨選擇することなく全てを記錄する。しかしその詳細さは物語化につながるようなものではない。志怪の記錄者は、讀者の興味に合わせて物語を綴るのではなく、怪異を實際に起こったことと認識し、できうる限り主觀を廢し、事實を記そうとする。その記述態度は現代の歴史家あるいは自然科學者のそれに近いといえるだろう。[8]再び戸倉氏の言葉を借りれば、「書かれている内容はわれわれの目には荒唐無稽、しかしその書き方は、自然科學の書物のように明瞭で紛れのないことを旨とする著作」が六朝志怪なのである。

このことを踏まえ、改めて『異苑』卷三の話に戻ると、この話も知り得た情報が選別されることなく全て記されており、その記述の態度は『搜神後記』卷七の柳の葉の露をなめる人の話と變わらない。つまり報恩譚の部分も、後半の部分も記錄者にとっては事實であり、記しておかなければならない情報という意味で等價のものであった。そして書き手は把握した事實を起こったそのままに書き記そうとした。あらかじめ話の展開と構成を考え、話の全體像を描いた上で、何をどのような順序で書くかということは、書き手の念頭にはない。そのような意味では、この話の構成や描寫を問題として、物語として未熟なものと批判するのは、本來事實の記錄として記している筆者の意圖を大きく逸脱した的外れのものと言い得るだろう。

しかし一方で『搜神後記』卷七の話は、柳をなめる不可解な人が登場する話であったのに對し、象は實在の動物であり、話自體も内容は不思議ではあるものの、恐怖を感じるような種類のものではない。むしろ象が「脚を交互に踏みならし、喜んでいる樣子であった」という文章などは、人々の中のさらにもっとおもしろい話を讀みたいという欲求を刺激するに十分な要素を含んでいるといえるのではないだろうか。つまり『異苑』卷三の話は筆者の意圖と拘わらず、自ずから物語として人々の興味を引くような要素を宿していた。それが人々のよりおもしろい物語を求める欲求を引きだし、さらには事實か否かにとらわれない想像を巡らした物話が生み出されていく原動力の一つとなったのだろう。

しかし物語の種があり、書き手の側に虚構の物語を書こうとする意思が芽生えていたとしても、それは容易に物語になるわけではない。虚構の物語が作られるためには、書き手が、そこから何かを引きだし、さらにそれに言葉を與え、加工していくという作業を經なければならない。そこで次節では『紀聞』「淮南獵者」と『廣異記』「安南獵者」を比較しながら、盛唐から中唐初期にかけての書き手が、どのように自らの筆で言葉を操れることを自覺し、新しい物語を作っていくのかを見てみたい。

二　『紀聞』「淮南獵者」と『廣異記』「安南獵者」（一）

まず『紀聞』と『廣異記』について簡單に説明しておきたい。

『紀聞』、牛肅撰。『新唐書』「藝文志」小説家類には「牛肅、紀聞十卷」の記述があるが、牛肅の傳は兩『唐書』にはない。『元和姓纂』卷五や『紀聞』本文中にいくつか牛肅自身のことあるいは家族關係に言及した記述がある。[9]これらの材料を總合すると、牛肅の先祖は代々懷州（現河南省沁陽縣）に居住しており、牛肅自身は七世紀末から八世紀はじめに在世し、岳州（現湖南省岳陽市）の刺史を務めたことがわかる。『紀聞』原書は現存していないが、『太平廣記』に百二十篇あまりの逸文が殘されている。『宋史』藝文志には「牛肅紀聞十卷」の下に「崔造注」の記述があり、當時注がつけられるほど廣く人々に讀まれていたことが窺える。[10]

逸文の内容は、志怪的な話、志人小説的な話、佛教に關する話の三つに大別できる。中でも「吳保安」（『太平廣記』卷一六六）は、吳保安が異境で人質となった友人郭仲翔のために保釋金を準備しようと、家族のことも顧みず、十年間の苦勞を經て郭を救い出すという曲折に富んだ内容を、登場人物の生き生きとした描寫を通して表現したもので、唐代小説史において「傳奇の先聲」[11]と位置づけられている評價の高い話である。このような作品がある一方『紀聞』には、志怪と變わらない話もあることから、全體として「志怪から傳奇への過渡的作品」と見なされている。

一方『廣異記』の作者戴孚については、現存する唯一の資料として、戴孚の友人で大曆期を代表する詩人顧況による「戴氏廣異記序」[12]がある。それによれば、戴孚は顧況とともに至德二年（七五七）科擧に合格し、五十七歳で饒州（現江西省鄱陽）の錄事參軍として生涯を終えた。また同序には『廣異記』原書は二十卷からなっていたことが記されている。しかし宋以後の書目を見ると、二十卷の原書は遲くとも北宋初めには散佚していたようである。幸い『太平廣記』を中心に三百餘篇の逸文が殘されており、これによってほぼ原書の全貌をつかむことができると考えられている。[13]『廣異記』に記された題材は鬼、神仙や狐、虎をはじめとする動物の話など、多岐にわたり、内容も獨創的な要素を多く持っている。しかし全體的には、志怪的な話が多いと見なされ、『紀聞』と同じく「志怪から傳奇への過渡的作品」と評價されることが多い。[14]

『紀聞』「淮南獵者」と『廣異記』「安南獵者」（以下それぞれ「紀・淮南」、「廣・安南」と省略）のあらすじは「ある日突然一人の獵師が、象の背に載せられ、森の奥深くへとつれていかれ、樹の上に置き去りにされる。するとそこには象達を苦しめる獸が現れ、象は獵師にその獸を退治することを求めていたことが分かる。そこで獵師は弓矢で獸を射止め、そのお禮として象牙をもらい歸る」というものでほぼ一致する。まず具體的にそれぞれの書き出しを見てみたい。

「紀・淮南」[15]張景伯之爲和州，淮南多象。州有獵者，常逐獸山中，忽有群象來圍獵者，令不得去。有大象至獵夫前，鼻絞獵夫，置之於背。獵夫刀仗墜者，象皆爲取送還之。

張景伯が和州（現安徽省）の刺史だった頃、淮南地方には、多くの象がいた。州のある獵師が、かつて山中で獸を追っていると、

突如象の一群がやってきて獵師を取り圍み、身動きできないようにした。そして大きな象が獵師の目の前にやって來て、鼻で獵師を抑えつけ、自分の背中に載せ、獵師が落とした刀や仗は、みな拾って獵師に返した。

「廣・安南」[16] 安南人以射獵爲業，每藥附箭鏃，射鳥獸，中者必斃。開元中，其人曾入深山，假寐樹下，忽有物觸之。驚起，見是白象，大倍他象，南人呼之爲將軍，祝之而拜。象以鼻捲人上背，復取其弓矢藥筒等以授之。

安南（現ベトナム）に、獵をして生計を立てている人がいた。やじりに藥をつけ、鳥や獸を射れば、あたったものは必ず倒れるという腕前であった。開元年間（七一三～七四一）、その獵師が山奥深く入り樹の下で晝寢をしていると、ふと何か觸れてくるものがある。驚き起き上がって見ると、そこには白い象がいた。大きさは他の象の倍ほどもあり、南の人々が將軍と呼んでいる象だった。そこで獵師は象に祈りを捧げ、おじぎをした。象は鼻で獵師を捲き上げ、背に乗せ、さらに弓矢や藥を入れた筒を取り、獵師に渡した。

『異苑』巻三では人間と象の出會いはわずか二十文字あまりで、「始興郡陽山縣有人行田，忽遇一象。以鼻捲之，遙入深山。」と書かれていた。つまり象が突然人の前に現れ、人を山奥へ連れていく、という起こった出來事だけが記されている。一方「紀・淮南」、「廣・安南」では傳えている情報の内容はかわらないものの、費やされている字數は二～三倍になる。その分獵師と象が出會う場面が詳しく描寫されているが、その描き方には兩話全體を通して關係してくる大きな違いがある。それは獵師と象の關係である。「紀・淮南」、「廣・安南」雙方の話に書かれた獵師と象の出會いを比べてみると、「紀・淮南」では獵師はいきなり多くの象に取り圍まれ、身動きできないようにされ、無理矢理象の背中に乗せられる。一方「廣・安南」では、樹の下で晝寢をしていた獵師は一頭の象に搖り起こされ、獵師は象を「將軍」と呼び敬意を表す。「紀・淮南」が非常に緊張した雰圍氣に包まれているのに對し、「廣・安南」の記述からは、人々が象に名前を付けるなど、普段から親しみの感情を寄せていた樣子が傳わってくる。

そしてこのような違いは單にこの部分にとどまらず、以後話の展開をも方向づけることになる。續く場面を見てみたい。

「紀・淮南」於是獸獵夫徑入深山。群象送於山口而返。入山五十里，經大磐石。(1) 石際無他物，盡象之皮革，餘血肉存焉。(1) 獵夫念曰，得無於此啗我乎。象負之且過，去石五十步，有大松樹。象以背依樹，(2) 獵夫因得登木焉。弓墜於地，象又鼻取，仰送之。(2) 獵夫深怪其故。象既送獵夫訖，因馳去。

そして獵師を背に載せるとただちに山奥深くへと入って行った。象の一群は山の入り口まで見送ると引き返していった。山を入って五十里ほど行くと、一つの大きな岩があった。(1) 岩の周りには他に何もなく、ただ象の皮革と食べ殘しの血肉があった。(1) 獵師は「まさかここで私を食らおうというのではあるまいな。」と思ったが、象は獵師を背負ったままそこを通りすぎた。

岩からさらに五十歩ほどいったところに大きな松の樹があった。象が背を樹に寄せたので、(2) 獵師は樹に登ることができた。弓が地面に落ちると、象はまたしても鼻で弓を取り、樹の上の獵師に渡した。(2) 獵師は象がそのようにするのをとても不審に思った。象は獵師を送り終え走り去って行った。

「廣・安南」因爾遂騁行百餘里，入邃谷，至平石。迥望十里許，兩崖悉是大樹，圍如巨屋，森然隱天。(1) 象至平石，戰懼，且行且望。經六七里，(2) 往倚大樹，以鼻仰拂人。(2) 人悟其意，乃携弓箭，緣樹上，(3) 象于樹下望之。(3) 可上二十餘丈，欲止，(4) 象鼻直指，意如導令復上。(4) 人知其意，逕上六十丈，(5) 象視畢走去。

そしてそのまま百餘里走ると、深い谷へ入り、平らな石のところまで來た。見渡せば十里餘りの彼方まで悉く大木が取り圍み、さながら大きな家のように、鬱蒼と天を覆っている。(1) 象は平らな石のところまでくると、恐れ戰き、少し進んではあたりを窺っている。六、七里ほど進むと、(2) 大樹のそばに寄っていき、鼻で獵師に觸れ上へ行くように促した。(2) 獵師はその意味に氣づき、弓矢をわきにはさんで、木に登って行った。(3) 象は樹の下で様子を見ていたが、(3) 二十丈あまり登ったところで、獵師が止まろうとすると、(4) 象は鼻で眞上を指し、もっと登れと言っているようである。(4) 獵師はその意味を察して、すぐさま六十丈登った。象はそれを見屆けると走り去った。

書き出しの部分ではさして明確ではなかったが、「紀・淮南」、「廣・安南」では雙方とも、作者は象の行動の意味、目的（獵師に獸を退治してもらう）を承知の上で、あえてそれをすぐには提示しようとはしないことが次第に明らかになってくる。上に引用した部分では、兩話とも象が何故獵師を連れていくのかについては何も記さない一方で、象は獵師を背に乗せた後、わざわざ弓矢を獵師に返したことを書いている。書き出しの部分でも、獵師を背に載せる時に、「獵夫刀仗墜者，象皆爲取送還之。」（「紀・淮南」）、「象以鼻捲人上背，復取其弓矢藥筒等以授之。」（「廣・安南」）と書いている。つまり兩作者は象の行動の目的を隱すと同時に、隨所に讀者に向かって何か怪しいことがありそうな氣配をにおわせている。兩話の作者は明らかにこの話に一種謎解きのようなおもしろさが潛むことに氣付き、サスペンスの手法を用いて話を臨場感あふれるものにしようとしている。サスペンスの手法とは「これから起こるであろう事件を豫兆するような事柄を狀況描寫の中に織り込み、次第に事件に向かう緊張を高め、しかも何が起こるかは既存のテキストからはまったく豫測できないように狀況描寫を仕掛け、劇的に事件を提示する」[12]ものであるという。この二話の場合、人間と象の間では言葉によるコミュニケーションが成り立たないため、獵師には象の目的がすぐにはわからないことに着目して、サスペンスが作られていく。

しかし基本的な着目點は似ているものの、何を焦點にサスペンスを盛り上げていくのかは、それぞれの話で異なる。「紀・淮南」では、まず傍線部 (1) (2) のように狀況を提示し、それに對して獵師は波線部 (1) (2) のような解釋をする。象を自分を襲うものと認識している獵師は、岩に附いた血肉を象に殺された人間のものと思いこ

み、自分もここで象に殺されるのではないかと思う。また傍線部（2）のように象が獵師を樹に登らせると、わざわざ弓矢を拾って獵師に渡したことを書いている。それに對し波線部（2）のように獵師は、自分を殺すはずの象が、自分に武器を渡すことを不思議に思う。傍線部に書かれていることは、事實であるが、波線部の獵師の解釋は象への不信感からくる思いこみのために、實際の狀況や象の意圖を曲解している。しかし岩についた血肉の横に象の皮革があったり、弓矢を獵師に返す象の行動は、獵師の解釋では說明しきれない矛盾を含んでいる。そして唯一本當のことを理解している象には、それを說明するすべがない。そこで獵師の象への不信感からくる思いこみと實際の象の目的とのズレは、解消されずに、緊張感が生まれる。

一方「廣・安南」では、全篇を通じて「紀・淮南」のように獵師の內面が記されることはない。それよりも印象的なのは傍線部（1）～（5）のように、具體的な象の樣子が多く書かれていることである。まず傍線部（1）では象の何かに怯える樣子が描かれ、何かこの先に恐ろしいことが待ち受けていることがほのめかされる。「廣・安南」の獵師は冒頭で示されたように、象に對して親しみの感情を持っているため、傍線部に示された象の動きを素直に自分に何かを傳えようとするものととらえる。そこで傍線部（2）の象の行動を受け、獵師は波線部（2）のように樹に登り、それをまた象が樹の下で見守る（傍線部（3））というように、この場面の獵師、象それぞれの動きは、お互いの動きを受けて次々と連鎖していき、またそのことによって、話の筋が展開していく。しかし獵師は象の意圖を正確に讀みとることができるが、それでもやはり何のために象は自分がそのようなことをすることを望むのか、その目的を理解することはできない。象の意味ありげな仕草を詳しく書き、讀む者を惹きつけつつ、肝心なことは明かさない、「廣・安南」ではこのような描き方で、サスペンスを盛り上げていく。

ところで『異苑』卷三にも象が棘を拔いてもらい喜んだ樣子が描寫されていた（病者卽起，相與躑躅，狀若歡喜。）。それも象の樣子を具體的に傳えるものであったが、「廣・安南」のように、物語に新たな展開をもたらすという作用はない。つまり『異苑』ではただ「象が喜んでいた」と書いても、話の展開には何ら支障はない。一方「廣・安南」では上にみたように、象の動きの描寫そのものが、話の展開を方向付けている。また「廣・安南」では象の姿を描くとき、常に獵師の視點を通してわかることのみを書き、かつ象の行動に關して解說めいたことはせず、提示するだけである。するとこのことによって讀者は、わけもわからず象に連れてこられた獵師と同じ情報しか與えられないことになる。つまり讀者も獵師と同じ視點を與えられることになる。象の行動は全て目に見えるかのように把握することができるのに、それが何を意味するのかはわからない。こうして「廣・安南」ではあたかも讀者自身が、獵師とともに、次に何が來るのかを待ち受ける緊張した空間に居合わせているかのような臨場感が生まれるのである。

以上のように兩作者は、獵師が山奧へ連れて行かれたのも無理はないと讀者を納得させながら、一方で一部の事實を伏せ、謎を殘し、それぞれの方法でサスペンスを盛り上げるような描き方をしている。起こったことを次々に前後のバランスを考えずにそのまま書き記していく『異苑』卷三のような描き方からは、このようなサスペンスは生まれ得ないことは明らかだろう。「紀・淮南」、「廣・安南」ともに、方

法は異なるながらも創作への第一歩を踏み出しているのである。

三　『紀聞』「淮南獵者」と『廣異記』「安南獵者」（二）

冒頭で指摘したように、虚構の物語を作るためには、單におもしろい題材を寄せ集めるだけでなく、それらを効果的に配置し、はじめと終わりまで破綻させることなくまとまりのある話に仕上げることが必要となる。「紀・淮南」、「廣・安南」ではそうしたことがどれだけ意識され、それぞれの着目點を生かすためにどのような工夫がされているだろうか。以下話の續きを見ながら、このことについて考察を續けてみたい。

「紀・淮南」（1）俄而有一青獸，自松樹南細草中出。毳毛髣髴，爪牙可畏，其大如屋，電目雷音，來止盤石，若有所待。（2）有頃，一次象自北而來，遙見猛獸，俯伏膝行，既至磐石，恐懼戰慄。獸見之喜，以手取之，投於空中，投已接取，猶未食噉。（3）獵夫望之嘆曰，畜獸之愚，猶請救於人，向來將予於山，欲予斃此獸也。予善其意，曷可不救。於是引滿，縱從毒箭射之。

（1）俄に松の樹の南にある草むらの中から、青獸が現れた。毛を逆立て、爪と牙は恐ろしくとがり、大きさは家ほどもある。稻妻のように目を光らせ、雷のような聲をあげ、岩のところまで來ると立ち止まり、何かを待っているようである。（2）しばらくすると先ほどの象が北からやって來た。遠くから猛獸の姿を見つけると、うつむき膝を地面につけて進み、岩に至ると、恐れ戰き、震え上がっている様子である。獸はこれを見て喜び、手で象を取り上げると、空中に投げ上げては手でうけとめたが、まだ食べようとはしなかった。（3）獵師はこれを見て、「畜生の愚かなることよ。人間に助けを請おうと思い、先ほどは私を山につれてきたのだな。そして私にこの獸を殺して欲しいというのだろう。どうして救わないことがあろうか。」と心の中で嘆くや、弓をいっぱいに引き、毒のついた矢を放ち、獸を射た。

「廣・安南」（1）其人夜宿樹上，至明，見平石上有二目光，久之，見巨獸，高十餘丈，毛色正黑。（2）須臾清朗，昨所見大象，領凡象百餘頭，循山而來，伏于其前。巨獸躍食二象，食畢，各引去。（3）人乃思象意，欲令其射，因傅藥矢端，極力射之，累中二矢。

（1）獵師は樹の上で一夜を明かした。明け方になると平らな石の上に二つの目が光っているのが見えた。しばらくすると、それは大きな獸の姿を現した。背は十餘丈あまり、毛は眞っ黑であった。（2）やがて邊りが明るくなると、昨日見た大きな象が、百頭餘りの普通の象を引き連れ、山腹をつたいながらやって來て、獸の前にひれ伏した。大きな獸は二頭の象に躍りかかって食べ、獸が食べ終わると、象は引き下がって行った。（3）獵師は象は自分に獸を射って欲しいのだと悟り、矢の先に藥を塗り、力の限り射った。立て續けに二本の矢が命中した。

引用したのは獸の登場、象とのやりとりの一部始終を獵師が樹の上

から見てはじめて象の目的を理解するという場面である。獵師が樹の上からみた様子を書くという同じ設定のもとでありながら、兩話の描き方は非常に對照的である。

まず第一に「紀・淮南」傍線部（1）では、獸がすぐに登場し、獸の姿を書くことに字數が費やされるのに對し、波線部（1）では獵師は樹の上で一夜を明かし、夜が明けるに從い闇の中に光る二つの光が見え、徐々にその全體像が現れるというように、獸登場の過程が詳しく書かれている。この描寫の力點の置き方の違いを通して見えてくるのは、兩作者の物語内における時間に對する意識の違いである。

全體的にみて「紀・淮南」は「廣・安南」にくらべ、話の中での時間の流れに對し無頓着である。「紀・淮南」では、例えば傍線部（1）傍線部（2）のように「俄」「有頃」という言葉で、直前の出來事との時間的なつながりが示されるくらいで、話全體を通してどれくらいの時間が流れていたのかは書かれない。一方「廣・安南」では波線部（1）の描寫から、獵師が樹の上に登った後の刻々と變化する時間の推移が感じられだけでなく、全編を通しても、獵師が森の中で晝寢をしていた時から、樹の上で一夜を明かし、獸退治の後、次の日の夕方象牙を謝禮としてもらい、再び晝寢をしていた場所に戻るまでの二日にわたる出來事として書かれている。さらに注意すべきなのは「廣・安南」波線部（1）では獵師が樹の上で一夜を明かした時間は、「其人夜宿樹上」とたった六文字で書かれているのに對し、夜明け以降獸が登場する樣子は非常に細かく書かれている點である。つまり「廣・安南」では話の展開にとって重要な細部が擴大され、濃密な部分とそうでない部分とがコントラストをなし、伸縮自在な物語獨自の時間が生み出されているのである。それと比べると「紀・淮南」では出來事と出來事はあたかも點のように存在しているかのようで、線的な時間の流れは感じられない。

またもう一つ兩話の對照的な描寫としては、「紀・淮南」傍線部（3）では獵師が狀況を解說しているのに對し、「廣・安南」波線部（3）では獵師の內面については一切書かれていないことを指摘することができる。これらは兩話の着目點の違いとしてすでに前節で指摘した通りであるが、ここではこうしたそれぞれの描き方を通して得られる獵師の人物像の違いについて考えてみたい。

「紀・淮南」では、冒頭より獵師が象に對する不信感を語るという方法によって、讀者にどのようなことを讀みとって欲しいのか、作者自らが導いてきた。前節では象の目的がわからないという狀況に拘束されている獵師の言葉は、「廣・安南」とは方法は異なるものの、話の展開に豫測がつかない讀者と同じ限定性を共有し、讀者に臨場感を與えることができた。ところが獸が姿を現した後は、傍線部（3）のように獵師の言葉は、讀者に對し狀況を解說し、作者の考えを代辯するようになる。つまり傍線部（3）では、作者は讀者が自分の意圖を讀みとれないこと、あるいは誤讀することを恐れ、獵師の言葉を通して、自分の考えを說明する。その結果「紀・淮南」から想像されるのは、象を愚かな畜獸と認識する非常に理性的な獵師の姿であり、それはすなわち知識人である作者牛肅自身の姿であるように思われる。

一方「廣・安南」の獵師の樣子からは、象に對する親しみと畏れが感じられ、素朴な獵師の姿が思い浮かぶ。これは『異苑』卷三に描かれた獵師の姿にも通じるものであり、普通の人よりも動物と交涉する機會が多く、鬪うと同時に慣れ親しむことも多いであろう獵師の實際の姿を反映しているように思われる。しかしそれも獵師のありのまま

の姿を描いたというわけではないことに注意しておく必要がある。例えば冷静に考えてみると獵師が二日にもわたって何の疑いも抱かずに象に従っていくということは、現實にはあり得ないはずのことである。前節で象の場面について見たように、獵師の反應はあくまでも物語を作っていく上で、作者の意圖に沿ったものである。しかしそうした獵師の姿が決して不自然に感じられないのは、すでに指摘したような物語内を流れる時間をはじめ、細部に至るまで物語全體が作者によってコントロールされているからである。

そのような意味で最も重要なのは「廣・安南」冒頭、「獵師が樹の下で晝寢をしていると、何か觸れてくるものがあり、獵師が驚いてみると象だった」と書かれた獵師と象の出會いの場面である。作者には獵師に觸ったのは象であることはわかっているはずであるが、あえて「象が觸った」と書かずに、「何かが觸った」と書くことによって、獵師の視點で周りの狀況を記していくというスタンスがすでにはじめから徹底されている。さらに書き出しの獵師が森の中で晝寢をしていたところを起こされたという設定によって、この話は實はまだ獵師の夢の中なのかもしれないと感じさせ、夢と現實のあわいのようなところで話が展開していくかのような幻想的な雰圍氣が作り出されている。このような設定によって讀者は日常的世界から切り離され、象の背に載せられ森の奥へつれていかれるという獵師の身に起こった不思議な出來事を追體驗するかのようにこの話の世界へと引き込まれていくことが可能となっていったのである。つまりこの冒頭の設定によって、非日常的で幻想的な時空間が生み出されると同時に、作者が獵師の視點から語っていくという虛構のルールが定められているのである。

それと比べると、「紀・淮南」では、物語内での時間や空間の設定に工夫した跡は見られない。空間の描寫に關しても、「廣・安南」では森の中は「至平石。迴望十里許，量崖悉大樹，圍如巨屋，森然隱天。」と具體的に空間をイメージさせるよう描寫されていたが、「紀・淮南」ではただ「入山五十里。經大盤石。」と書かれているだけである。

このように「廣・安南」では作者は決して自己を顯在化させず、また自ら定めた虛構のルールを遵守するが、物語を始めから終わりまで隅々に至るまで統御し、一つ一つの描寫が全體に與える影響に自覺的である。一方「紀・淮南」では、物語を創作しようとする意識はあるものの、作者は獵師を通して思い通りのことを語らせるという方法に自覺的な以外には、全體の構成、整合性を考慮していない。

四　『紀聞』「淮南獵者」と『廣異記』「安南獵者」（三）

以下續いて話の結末を見ながら、「紀・淮南」と「廣・安南」の書き方の違いは、どのように生じたのかを考えてみたい。

「紀・淮南」小象乃馳還。俄而諸象二百餘頭，來至樹下，皆長跪，展轉獵夫下。前所負象，又以背承之，負之出山。諸象圍繞喧號，將獵夫至一處。（1）諸象以鼻破阜，而出所藏之牙焉。凡三百餘莖，以示獵夫。又負之至所遇處，象又皆跪，謝恩而去。獵夫乃取其牙，貨得錢數萬。

（獸が倒れた後）小象が馳せ歸って來た。續いて俄に二百頭あまりの象が樹の下にやってきて、みな長跪したり、獵師の下をぐるぐる回ったりした。先ほどの象がまた獵師を背に載せて、山を出

た。（1）他の象も周りを取り圍み、吼えながら、獵師をある場所に連れて行った。そこで象達は鼻で、丘を突き崩し、隱していた象牙を取り出した。およそ三百本あまりの象牙を獵師に示すと、再び獵師を背に載せ、最初の場所に戻った。象はそこでまた長跪し、感謝の氣持ちを表すと、去っていった。獵師はその象牙を持ち歸って賣り、數萬錢の金を得た。

「廣・安南」頃間，群象五六百輩，雲萃吼叫，聲徹數十里。大象來至樹所，屈膝再拜，以鼻招人。人乃下樹，上其背，象載人前行，群象從之。尋至一所，植木如隴，（1）大象以鼻揭楂，群象皆揭，日旰而盡，中有象牙數萬枚。象載人行，數十步內，必披一枝，蓋示其路。訖，尋至昨寐之處，下人於地，再拜而去。

しばらくすると五、六百頭もの象の群れが雲のように集まってきて吼え叫び、その聲は數十里四方に響きわたった。大きな象が樹の所までやってきて、膝を折り曲げ、再拜しながら、鼻で獵師を招く仕草をした。そこで獵師は樹を折り、象の背に乘ると、象は獵師を載せて、先頭に立ち、ほかの象はそれに從った。やがて樹が小高い丘のように積んである場所についた。（1）大きな象が鼻で樹を除きはじめると、ほかの象も皆樹を取り除きはじめた。日が暮れる頃になってやっと樹がなくなると、中から象牙が數萬本出てきた。象は獵師を背に載せて歩きはじめたが、數十步進むごとに必ず樹の枝を一本折り取った。道しるべにするつもりのようだった。その道が盡きると、昨日晝寢をしていたところに行き着いた。象は獵師を地面に下ろすと再拜して去って行った。

象が謝禮として象牙を渡す場面である。「紀・淮南」傍線部（1）では「象は隱していた牙を出した」としているのに對して、「廣・安南」波線部（1）では「象が日暮れまでかかって樹を取り除くと、そこには數萬本の象牙があった」と書かれている。「廣・安南」では最後まで、獵師の視點で周りの狀況を記していく描き方で一貫している。

これまで「紀・淮南」と「廣・安南」が作られていく上で、大きな違いとなったのはそれぞれの獵師と象の關係のとらえ方であった。「紀・淮南」の獵師の象への不信感や象を人間より劣ったものとする考え方は、作者牛肅の考えを代辯したものであった。それと同じように「廣・安南」においても、作者は獵師や象の立場に目線を合わせることのできる柔軟さをもっていたことによって、獵師の視點から物語を描いていくことができたのではないだろうか。そして獵師や象の立場に目線を合わせることができれば、何ら説明的な言葉を使わずとも、それらが自由に動きだし、幻想的で豐かな物語の世界を作り出してくれたのである。逆に動物を人間よりも劣った存在と見なす「紀・淮南」の作者にとっては、象の動きは説明を加えなければ、人間に理解できるものではなかったのだろう。このように兩話の違いの根底には、兩作者の異類觀が反映されていると考えられる。[18]

おわりに

本稿では「紀・淮南」と「廣・安南」という象の報恩譚を讀み比べながら、一般に「志怪から傳奇への過渡的作品」と評價されてきた兩小説集が、實際はすでに自覺的に話を作り出していることを明らかにしてきた。まず第一節で志怪の描き方を確認した上で、第二節におい

て、「紀・淮南」「廣・安南」兩話がサスペンスを作り出すことを目的としながらも、それぞれ着目點の違いがあることを明らかにした。さらに第三節、第四節では「紀・淮南」は、全體の構成には無頓着な面があり、時間の設定、描き方の一貫性などの點で「廣・安南」には及ばない點があることや兩作者の異類觀の違いを指摘した。

最後に以上の考察が從來論じられてきたいくつかの唐代小說史上の問題に對し、どのような問題提起をできるのか考えてみたい。

まず以上の考察を通し、王度『古鏡記』、無名氏『補江總白猿傳』など一部の作品を除いて、見るべきものはないとされてきた初唐から中唐傳奇勃興以前に書かれた小說を見直す必要性を指摘することができるだろう。例えば「紀・淮南」の前半のように、主人公の獨白と狀況のズレによってサスペンスを盛り上げるという方法は、完全な一人稱形式とはいえないが、王度『古鏡記』における、一つ一つのエピソードをつなげる方法としての一人稱や張鷟『遊仙窟』の語り手としての一人稱よりも技法としてより工夫が加えられている。

また前野直彬氏は、中唐初期の傳奇、陳玄祐『離魂記』を分析した際に、倩娘との緣談を斷られた傷心の王宙を倩娘が追いかけてくる場面で、「王宙が船中で眠れずにいると倩娘が追ってきた」と書けばすむところを「船室で眠れずにいる王宙の耳に川岸を大急ぎで走る足音が聞こえてきたので、誰かと尋ねてみると裸足で走ってきた倩娘であった」（夜方半，宙不寐，忽聞岸上有一人行聲甚速，須臾至船。問之，乃倩娘徒行跣足而至）と描寫していることに注目し、六朝志怪にはこのような詳しい描寫はなく、唐代傳奇でもそう多くは見られない、と指摘している。[19] しかしこのような一人の人物の限定された立場から狀況を描き、臨場感を增すという方法は、我々がすでに「廣・安南」の中に確認してきたものである。

これらはごくわずかな例であるが、ほかにも「廣・安南」に見た全體の構成、時間の設定の方法なども、後の作品に影響を與えた可能性は十分考えられる。また何よりも生き生きとした象の姿を描き、豫測のつかないサスペンスで、讀者を樂しませ、讀者に虛構の物語のおもしろさを傳えたこと自體を「廣・安南」の功績の一つと言えることができるだろう。

本稿では紙面の都合上、『紀聞』『廣異記』全體の性格を考察することはできなかったが、大まかに言うと全體的にみて『紀聞』は、自分のねらいをつけた一點をもとに話を構成し、讀む者に一擊を與えるような仕掛けをうまく施した話を得意とし、『廣異記』では曲折に富んだ展開を持つ話を得意とする。そのような意味では『紀聞』の話の中では「傳奇的」であると評價の高い「吳保安」などもよりも、「森の中で出會った老人と婦人が雙方を狐と勘違いする」という笑い話（「田氏子」卷四五〇）などしかけに工夫を凝らす話の方が、この小說集の特徵をよく表しているように思われる。むしろ細かく見ていけば「吳保安」などは全體の構成、時間や空間の設定の仕方、話の進め方において「廣・安南」には及ばないところを指摘できるだろう。このように兩小說集の評價も一つ一つの話を分析した上で再考される必要がある。

一般に中唐の傳奇『李娃傳』や『鶯鶯傳』が、怪異を含まず、人間世界のことを描いていることから、傳奇以前の話が怪異的な要素をどれだけ含んでいるかを基準として志怪的か傳奇的か判斷することが多いように思われる。例えば李劍國氏はこの基準を適用し『廣異記』は題材が怪異のことを主とする中に傳奇的な要素が認められる「志怪傳

奇小説」に、『紀聞』は「吳保安」など志人小説的な話があることを重視して傳奇的要素が志怪的要素よりも多いとみなし、「傳奇志怪小説」に分類している。[20] しかし「紀・淮南」と「廣・安南」を見れば、單純に題材のみで、六朝志怪と同じようなものと見なすことはできないことがわかるだろう。むしろこのように題材によって機械的に志怪的、傳奇的と判斷してきたことによって、これまで傳奇勃興以前の小説に志怪から一歩踏み出そうとする動きがあったことを見落としてきたのではないだろうか。

今後このような視座のもとに、從來の唐代小説史の枠組みにとらわれず、一つ一つの作品の分析を積み重ねながら、唐代小説全體を見直していくことによって、これまで十分に明らかにされてきたとはいえない、志怪から傳奇への變遷の過程を解明する手がかりを得られるのではないだろうか。『紀聞』『廣異記』全體の性格の解明も含め今後の課題としたい。

注

(1) 『中國小説史略』第八篇「唐代之傳奇文（上）」

(2) 内田道夫『中國小説研究』（評論社・昭和五二年）p六一

(3) 侯忠義『隋唐五代小説史』（浙江古籍出版社・一九九七）p四「表現手法上、從記實發展到盡幻設、有意識、有目的地進行虛構」

(4) 『紀聞』と『廣異記』については第二節の冒頭で説明するが、現在兩小説集の内容は『太平廣記』に殘された逸文を通して見ることができる。そこで以下の兩小説集の題名は『太平廣記』によるものとする。

(5) テキストは『異苑』（中華書局・一九九六）を使用。譯出に關しては前野直彬他譯『幽明錄・遊仙窟』（平凡社・東洋文庫・一九九二・初版は一九六五）所收『異苑』を參考にした。

(6) 『東洋文化』六一・一九八一所收。戸倉氏の論考はこの他に「變身譚の變容―六朝志怪から「聊齋志異」まで」（『東洋文化』七一・一九九〇）、「志怪小説とは何か」（月刊『しにか』一九九七・三月號）、「傳奇小説とは何か」（月刊『しにか』一九九七・十月號）がある。

(7) 戸倉氏は「知り得た限りのデータを書き連ねてみるほかに、それらの事象を解釋するすべのなかったことを示している」と指摘している。

(8) 戸倉英美氏は「現在の著述でこの筆法に近いものを探すなら、それは圖鑑の解説であろう」と述べている。

(9) 「牛肅女」（卷二七一）、「牛成」（卷三六一）、「懷州民」（卷三六二）、「牛氏碓」（卷四〇〇）、「田氏子」（卷四五〇）などがある。（括弧内はいずれも『太平廣記』の卷數。）また牛肅の生涯については、卞孝萱「『紀聞』作者牛肅考」（一九六二）、内山知也「牛肅と「紀聞」について」（『隋唐小説研究』木耳社・昭和五二年）に詳しい。

(10) 注の一部も現在『太平廣記』中の逸文に殘っている。崔造については、内山知也前掲書を參照のこと。

(11) 程毅中『唐代小説史話』（文化藝術出版社・一九九〇）第三章「唐前期的小説集」

(12) 『文苑英華』卷七三七、『全唐文』卷五二八所收。

(13) 『廣異記』の逸文の流傳については、杜德橋（Dudlidge, Glen）「廣異記初探」（『新亞學報』一五・一九八六）、及び拙稿「北京圖書館所藏『廣異記』抄本について」（『東京大學中國語中國文學研究室紀要』第一號）を參照のこと。

(14) 『紀聞』と『廣異記』は「志怪から傳奇への過渡的作品」という評價でくくられているが、それぞれに個性のある作品である。本稿では兩書の全體的な性格についてふれる餘裕はないので、この點については稿を改めて論じることとしたい。兩書への評價は個別の論文のほかに、

程毅中『唐代小說史話』（文化藝術出版社・一九九〇）、李劍國『唐五代志怪傳奇敍錄』（南開大學出版社・一九九三）の該當部分を參考にした。『廣異記』について個別に論じたものとしては、內山知也「中唐初期の小說―「廣異記」を中心として―」（『加賀博士記念中國文史哲學論集』講談社・一九七九所收）、內山知也「中唐小說の二つの傾向について」（『小尾博士古希記念中國學論集』汲古書院・一九八三所收）、吳秀鳳「廣異記研究」（輔仁大學修士論文・一九八六）、Dudbridge, Glen Religious Experience and Lay Society in T'ang China–Reading of Tai Fu's Kuang-i chi (Cambridge university press 1995) がある。

(15) 以下『紀聞』のテキストは中華書局版『太平廣記』卷四四一を使用。

(16) 以下『廣異記』テキストは方詩銘輯校『冥報記・廣異記』（中華書局・一九九二）を使用。しかし引用題名の後ろの括弧は、『太平廣記』の卷數を表す。譯出に關しては前野直彬編譯『唐代傳奇集2』（平凡社・東洋文庫・一九九四・初版は一九六四）所收『廣異記』を參考にした。

(17) 小森陽一『構造としての語り』（新曜社・一九八八）p四一

(18) さらにいえば、兩話の描き方の違いには、それぞれの讀者への信頼感の違いも現れている。「廣・安南」では、讀者が想像力を働かせて、書かれたものから物語の世界を廣げていくことを期待されているが、「紀・淮南」では、讀者の誤讀をおそれ、全てが解說されている。また紙面の都合上詳しく述べられないが、兩話の異類觀の違いは、兩小說集の他の話にも見られる。

(19) 「不隨園詩話（七）」（『中國古典研究』第三十六號）p六八

(20) 李劍國前掲書。